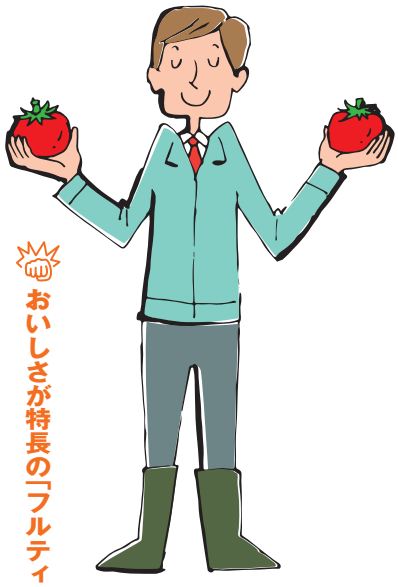
猛暑に打ちかつ!

良品を作る品種選定と栽培技術

トマト

高温による着果率の低下を防ぎ、裂果に強い品種を選ぶ



タキイ研究農場
長尾　亘祐（ながお　こうすけ）

品種選定

夏場のトマト栽培では主に高温による着果率の低下と裂果の2つが大きな障壁となるため、これらに対しすぐれた性質の品種を選ぶことが成功への第一歩となります。

大玉トマトと比べミニ・中玉トマトの方が高温着果性・耐裂果性にすぐれており、その中でも特におすすめの2品種をご紹介します。

夏の栽培で高い収量を期待できる「TY千果」

「TY千果」は、高温着果性・耐裂果性にすぐれた特性に加え、ヘタが取れにくい特性から夏場の栽培でも高い収量が期待できます。果実は低段から安定して糖度が高く、食味にすぐれています。果皮は濃赤色でつやがあり、ヘタの形状も美しく果ぞろいも良好なことから、パック詰めでの販売がおすすめです。

おいしさが特長の「フルティカ」

「フルティカ」最大の特長はその食味にあります。平均で7～8度の糖度があり、酸味が少なく食感が滑らかなことから糖度の数値以上に甘さを強く感じられます。平均果重が40～50gありながら耐裂果性にもすぐれているため、樹上で完熟させてから収穫することで、より味に深みを出すことができます。

↑食味がよい「フルティカ」。

↑高温下でも着果が安定しやすい「TY千果」。

栽培ポイント

夏場を乗り切る草勢管理

昨今の夏の栽培を成功させるには、高温期に入る栽培中期以降も初期の草勢を維持することが大切です。ミニ・中玉トマトの1回目の追肥は、第4花房の開花時が目安です。追肥のタイミングが遅れてしまうと、着果負担の増加に伴い急激に草勢が低下してしまうので、こまめに草勢判断をし、追肥が遅れないよう努めましょう。

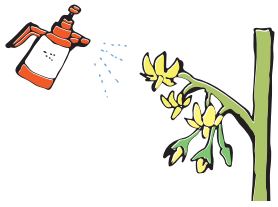
ホルモン処理で確実に着果

トマトは32～35℃以上の高温が続くと、花粉の機能が低下し受粉しづらくなるため着果率が低下してしまいます。特に、外気温が30℃を超えてくる夏場のハウス内温度は容易に40℃以上まで上昇するため、いくら高温着果性にすぐれた品種といえども自然着果が難しくなります。このような時期は150～200倍希釈の「トマトトーン」によるホルモン処理をして着果を促すことが効果的です。気温が高い時期は開花の間隔も短くなるので、1週間に2回のペースで晴天日に行いましょう。

裂果対策

トマトが裂果する主な原因としては、直射日光や急激な吸水があげられます。直射日光への対策としては草勢をやや強めにして上位葉を充実させることや、斜め誘引をすることで葉で果実が隠れやすくすることが有効です。潅水は1回の量を少なめにし回数を増やすことで、土壌水分が安定し裂果の発生が抑制できます。遮光・遮熱資材を活用することを検討してもよいでしょう。

トマトの結実を助けるためのホルモン処理



3～4花開花時にトマトトーン150～200倍希釈液をかける。茎の先端やその付近の葉に薬液がかからないように散布する。

トマトの茎先端部における草勢判定の目安

栄養が不足：葉は上に向いて細く、葉脈が紫変する。

栄養が適度：葉面が水平になる。

栄養過剰：葉面にでこぼこができ、葉はカールする。